

風越窠址

附風越高校遺跡立合調査
埋藏文化財発掘調査報告書

1979. 3

長野県教育委員会
飯田市教育委員会

風越窯址

附風越高校遺跡立合調査
埋藏文化財発掘調査報告書

1979. 3

長野県教育委員会
飯田市教育委員会

例

言

1. 本書は昭和54年3月長野県教育委員会の委託により、飯田市教育委員会が受託して実施した、県創造の森建設に伴う風越高校遺跡の工事中の立会調査と風越窯1号窯址の確認発掘調査の報告書である。
2. 本書は極めて短期間の発行をよぎなくされ、このため資料提供と問題提示の報告となっている。
3. 本書の編集及び執筆は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤が、窯址実測図作成は佐藤・牧内が、製図は田口・佐藤が分担した。
5. 遺物は創造館に保管・陳列されることにし、窯址は埋戻し、その位置は史跡公園として保存されることになる。

目

次

例 言	2
目 次	2
I 環 境	3
II 立会調査及び窯址確認発掘調査経過	4
III 調査結果	6
IV ま と め	8
調査組織	10
おわりに	11
図 版	



風越1号窯燃焼室…配電マンホールのため2分の1は破壊



風越1号窯出土瓦

I 環 境

風越高校遺跡・風越窯址は、長野県飯田市大王路に所在し、旧飯田風越高等学校跡地にある。

飯田市街地は飯田盆地の中心部にあり、盆地の背後には木曾山脈が、東には赤石連山を望み、この中間を天竜川が南流し、その両岸に見事な河岸段丘が発達している。飯田市街地は伊那谷第5段丘面にあり、洪積中位段丘に位置づく。西は木曾山脈の風越山麓より続く広大な扇状地のびており、南に天竜川の支流飯田松川、北は飯田松川の支流野底川にはさまれた南東に緩く傾斜する台地上にあり、遺跡は市街地の北東端部に立地する。標高505m～510m、東は比高差10～15mの野底川の浸蝕崖となり、この浸蝕崖を利用して風越窯は構築されている。野底川の対岸は上郷町別府である。すぐ南東は一段低くなって飯田

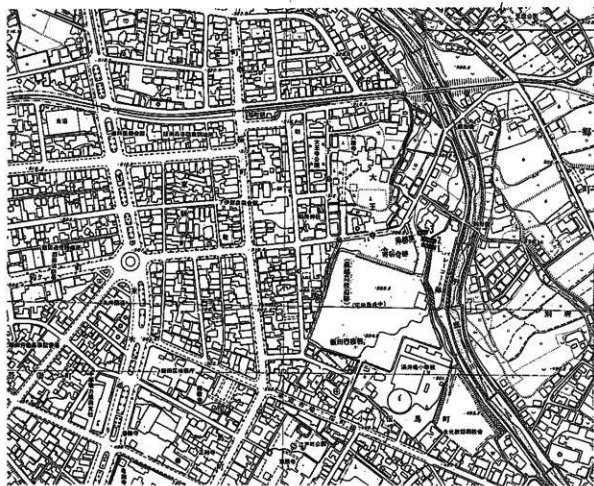


図1. 風越遺跡・風越窯址位置図(1:5,000)

市立浜井場小学校があり、高距4mを測る。

微地形をみると、旧校舎面の北側は2m前後の切採り面をもって校地が地ならしされ、旧運動場跡は地山面となり、校舎面の南東側は深い埋立地となっており、寄宿舎跡はほぼ原地形を残し、2m余の高さをもって、北200mにある国鉄桜町駅と比高10mを測る扇状地面の先端部となっている。東は野底川への浸蝕崖となっているが、野底川の氾濫の影響を繰り返し受けたものとみられ、飯田警察署建設時の立合調査の観察によれば、本館用地西端部に南北方向にローム層を切るのがみられ、その東側は黒褐色土の深い堆積層とその下部は砂礫層となり、洪積台地面のローム層を切りとり、氾濫の跡を物語っていた。

風越窯址は遺跡の東側の野底川の浸蝕崖に構築されており、野底川よりの斜面の下部は旧風越高校バレーコートにより埋立となり、コートへ下る道のため中程は二段となる石垣によって削りとられているが、野底川氾濫による砂礫層の堆積によって成っており、上段面と下段の埋立面との比高差7mを測り、さらに1.5m下に埋立前の窯址燃焼室底部があり、砂礫層によって覆われている。

周辺の主要遺跡を概観すると、北250mに大門町遺跡があり、ここでは昭和48年7月天理教飯田分教会で車庫建設の際、多量の土器の出土をみ、飯田高校考古学研究クラブによって住居址1を調査し、縄文中期中葉勝坂式の良好な資料を得ており、地形的に本遺跡につながる立地によって注目される。野底川を隔てた東の台地上にある高松原遺跡は、昭和51年度飯田高校第2グラウンド建設用地調査では、弥生時代後期の大集落と縄文時代中期の遺構が発掘調査され、良好な多くの資料と、飯田地方における弥生後期における多くの問題を提示している。

風越高校遺跡では旧風越高校跡地に飯田警察署の建設が決まり、この工事に伴う立合調査が昭和52年8月実施され、弥生後期住居址1、柱列址1と近世建物址1、土蔵3(時期不明)が調査されているが、前記のように野底川氾濫による切りとりのため、古い時期の遺構は失われたものとみられる。

II 立合調査及び窯址確認発掘調査経過

風越高校跡地は弥生後期の遺跡であり、また江戸時代末期の風越窯址として知られるところである。風越高校遺跡についての調査は昭和52年8月飯田警察署建設に伴う立合調査で、弥生後期住居址1、柱列址1、近世掘立建物址1と時期不明の土蔵3が検出調査されている。しかし遺跡の大半は、東を流れる野底川の氾濫によって切られていることが調査によって確かめられ、また旧運動場は校舎建設の造成工事で削りとられ地山を露呈していることも明らかとなった。北側の1段高位となる寄宿舎跡はほぼ自然状況を残すものとみられる。東側の野底川浸蝕崖には風越窯3基の所在が知られており、昭和31年6月バレーコート建設に伴う道路工事の際、大沢和夫によって1号窯を確認、工事区域の調査がなされ、その調査報告が「伊那」1956年8月号に掲載されている。昭和52年辻那真司は、1号窯の北にある2号窯の発掘調査を行っている。それについての報告は未だなされていない。さらに北に3号窯の所在が知られていたが、宅地造成のため既に破壊されてしまっている。

昭和53年度に県創造の森の建設が着手され、それに伴う風越高校遺跡の工事中の立合調査と、風越窯址確認発掘調査と窯址保存が計られることになり、県教育委員会の委託により飯田市教育委員会がその調査を委託して実施したのが本次調査である。

昭和54年2月28日調査打合会をなし、調査準備と風越窯についての事前調査を行ない、3月9日より調査にかかる。現場調査は3月20日まで行なう。工事中の遺跡立合調査は30㎡について行なうが、遺構

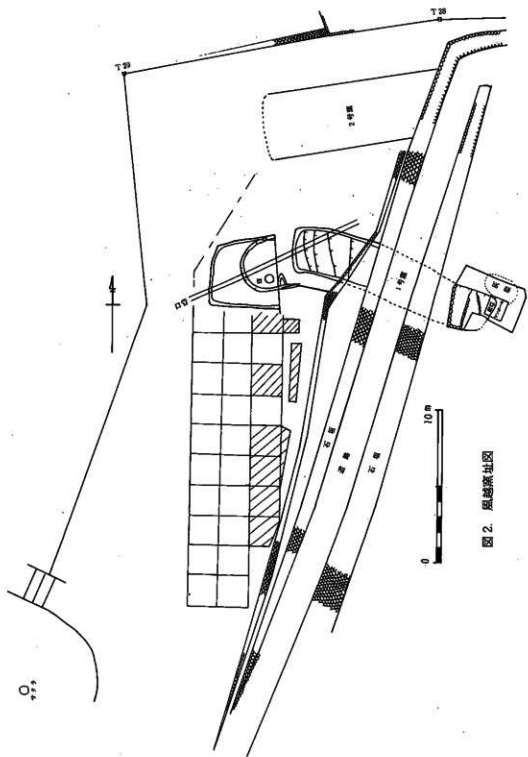


图 2. 凤城址图

発見にいたらず、僅か数点の風越焼片を検出したにすぎない。

風越1号窯の位置確認は、事前調査の測点とのずれにより手間どり、2号窯調査の盛土にかかって発見され、その位置を確かめるため再度にわたる盛土の移動を行う不手際もあった。窯址調査面積は100㎡。確認その他の調査面積120㎡である。

現場調査後、遺物の整理・復原、作図・製図をなし、報告書作成にとりかかる。

2号窯の燃焼室の所在するとみる地点は、現在工事作業小屋が建てられ、そこには54年度秋に配電工事による掘削が行われる予定となっており、その調査を必要とする。

調査日誌

- 3月9日(晴) 器材運搬、グリッド設定、調査、窯址はなし。
10日(雨) グリッド調査、雨となり作業を午前で中止。
12日(晴) 窯址を検出する。最初予定していた位置より北によってあり、検出に苦労する。
13日(くもり) 窯址検出作業による盛土の移転に時間をかける。
14日(くもり・小雨) 窯址のプラン検出、排土作業。
15日(晴) 窯址上段部の調査をほぼ終える。
16日(晴) 窯址上段部写真撮影、測量。
17日(くもり・雨) 配電マンホール部に灰溜部を発見、調査にかかる。
18日(晴) 焚口を検出する。
19日(晴) 焚口から燃焼室への移行部を調査。掘上げ、写真撮影。
20日(くもり) 測量、地質調査を矢亀勝俊先生の指導によって行い、現場作業を終え、器材撤収。

Ⅲ 調査結果

1. 風越窯1号窯址の構造

2号窯の南5.5mにあり、野底川の浸蝕崖の東斜面を利用して東面に開口するよう構築され、中軸はN70°Wを測る。連房式登窯であり、窯は焚口から燃焼室・焼成室まで約14m、焚口の一部は配電マンホールのため破壊されている。燃焼室から焼成室への移行部は砂層のため今回未調査に終わっているが、パレーコート造成の際、石垣寄りの一部を大沢和夫によって昭和31年6月調査され「伊那」1956・3月号にその報告がなされている。またその時の遺物は風越高校に保管されている。

焚口から燃焼室の幅3m、長さ2.7mとみられ、2段に並ぶ石組によって区切られ、焼成室となるものとみられる。焼成室の幅は3.5m、壁は崩れ、中心部はパレーコートの道路によって断ち切られ、石垣が二段に築かれ、このために破壊されている。上段部は残るが、底部は砂層のため段は崩れ、正確な把握はできないが5段に残る段には砂層であるが焼けは著しい。煙道は破壊されているが、焼石で囲まれた痕跡があり、煙道になるものとみられる。

煙道部とみる所から西1.2mに径5.6mの半円となる深さ30cm余の掘りこみがあり、それを埋めた上層と、さらに西に続く深さ7～30cmの掘りこみがあって、その全面は粘土を精選した後の残渣によって覆われていた。また半円の東端から煙道部にかけて北寄りに窯壁・天井部に使用された煉瓦・マクラ・窯道具

片が堆積していた。半円部の両側に径58cmの大甕が据えられており、調査の初めには肥溜ともみられたが、良質な甕であり、おそらく軸葉を溶いた甕とみられたが、不明である。この一帯が作業場であったと思われる。

燃焼室の北側に灰原があり、配電マンホールに一部は破壊され、北側は材料置場となり、不十分な調査に終わっているが、サヤをはじめ窯道具片・焼損じ品の多くが重なり合って出土をみた。

2 遺物

風越焼の磁器が主体で本格的染付物に青磁・白磁がある。茶碗、湯呑茶碗、皿、徳利、盃、急須があり丹念な絵付がなされ、精巧なものである。素焼のもの、絵付を施しただけのものも多くみられ、完形品はないが、整った形を残すものは数点みられる。

底に銘入が多く「信飯」・「飯田」・「イヴダ」、印による「飯田」・「飯田新製」があり、中には「嘉永元製」銘の皿、「嘉元」で欠けている盃、「」銘の湯呑茶碗、「元」銘の盃がある。「作之」・「」、内底部に「君子慎独」外側に漢詩を書いた茶碗片がある。

磁器の他に雑器の鉢・生焼けのスリ鉢等の破片が僅かにみられている。窯道具にはサヤが多く、ツク、台、エブタ等があり、粘土を乾かす吸甕も発見されており、また蓋を利用したとみる色見道具がある。

IV ま と め

風越窯は嘉永元年(1846)飯田商人岩崎仁右衛門が陶工水野儀三郎らを美濃から招き、磁器を焼かせたもので、飯田藩主堀親義のお庭焼、風越焼として知られる。岩崎氏の事業失敗没落によって5年間の短期間で廃止となる。長野県では須坂窯と共に磁器を代表する窯である。岩崎氏没落後、一時風越窯を利用し雑器を焼いたといわれているが、今次調査で鉢・生焼のスリ鉢等の破片が検出され、それを物語っている。

風越窯は連房式登窯の本業窯である。30度をこす急傾斜を利用し構築されており、燃焼室は一部破壊されているが、石を並べ段を作り、焼成室へと移行するが、その部分は礫の盛土のため調査不能であったがその一部は昭和31年6月バレーコート造成時にその一部が調査されていたことは幸であった。窯址の中央部はバレーコートへの道路のため削りとられ破壊されてしまっている。

上段部は砂層のため崩れ、その構造は十分に把握できなかったが、砂層には焼けは著しく認められ、その上段部より窯壁、窯道具の破片の多量の出土をみた。

遺物は完形品こそないが、染付物の磁器・青磁・白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている。銘には「飯田」・「信飯」が最も多く「飯田新製」が2点みられているが、風越銘は発見されなかった。「嘉永元製」・「嘉永元年」・「元」銘がみられ創業初期のものともみたいが、元年を最後まで使用したかも知れない。「」銘は瀬戸よりの水野儀三郎の所持茶碗にこの銘があり、瀬戸との関連を知るものとして注目される。(水野英雄氏蔵)

作業場は粘土精選後の残渣の堆積からみて、上段面にあったものと推定される。飯田地方には磁器を焼く材料はなく、美濃・尾張よりの移入によらなければならず、運搬の便から、そこが利用されたものと思われる。

昭和31年度調査の遺物をあわせ、さらに昭和52年度調査の2号窯の遺物との対比が必要であり、さらに2号窯の現在創造館建設の作業小屋の地点にあるとみる焚口・燃焼室の調査によって風越窯址の実態を

さらに知ることができよう。

本次調査にあたって、大沢和夫先生・水野英雄先生・矢亀勝俊先生の御指導・助言があり、作業にあられた方々の熱心な作業態度、下伊那建設事務所・教育事務所の御厚意と工事を請負われた平和工業の御協力を深謝したい。

(佐藤 魁 信)

調 査 組 織

1. 風越高等学校遺跡立合調査、風越窯跡確認埋蔵文化財発掘調査委員会

勝 野 好 一	飯田市教育委員会委員長	
沢 柳 俊 夫	飯田市教育委員	
大田中 一 郎	"	
松 島 勝 郎	"	
林 研 二	飯田市教育長	

2. 調 査 団

団 長	佐 藤 魁 信	日本考古学協会員
調 査 員	大 沢 和 夫	"
	塩 沢 仁 治	長野県考古学会会員
	速 那 真 周	
	矢 亀 勝 俊	地質学者
	水 野 英 男	陶芸家

3. 指 導 者

丸 山 敏 一 郎	県教育委員会文化課指導主事
関 孝 一	"

4. 事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課

相 津 実	社会教育課長
山 下 舜 平	課長補佐 係長
熊 谷 里 恵 子	主 事

5. 作 業 員

福 島 明 夫	北 村 重 実	中 平 兼 茂
藤 本 徳 男	平 栗 光 司	木 下 伍 一
田 口 三 郎	佐 藤 いなゑ	牧 内 住 子
柳 沢 八 重 子	田 口 さなゑ	

お わ り に

県創造の森の建設が旧飯田風越高等学校の跡地に計画され、53年度に一部造園工事、54年度に創造館及び公園の工事が行われることになった。

この建設地内に風越高校遺跡と江戸末期の嘉永年間、飯田城主堀親義公が城内で使用するため美濃から陶工を招き窯を築いて磁器を焼いた窯跡があることが確認されていたので、県との合議の上発掘調査を実施することにした。

風越高校遺跡については、植樹等の公園化のため大きな破かいが無いと考えられたので、配管工事等の際調査員が立合い、その所在を確認するにとどめたが遺構と思えるものは発見できなかった。

風越窯址については、52年度において2号窯址の調査が遮那真司氏によって行われた経過があり、今回は1号窯址の確認とその調査が主体となった。

旧風越高校の校庭拡張等の際一部は完全に破かいされていたが、1号窯址の確認と多数の貴重な遺物を発掘することが出来、大きな成果を残して完了しましたことは感謝にたえない。

調査体制は、団長に佐藤魁信先生、調査員に大沢和夫、塩沢仁治、遮那真司先生をお願いし、とくに矢嶋勝俊先生は地質面の調査を、水野英男氏は陶芸家の立場からの調査と指導をお願いし、各先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的に協力をいただき、指導者の文化課指導主事丸山敏一郎先生、関孝一先生には全般について適切な助言をいただきました。

また遺物の整理、報告書の作成執筆は団長の佐藤先生が熱意をもって当られ、ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和 54 年 3 月

飯 田 市 教 育 委 員 会

図版 I 窯址所在地



全景 南から



近景 南から



近景 北から

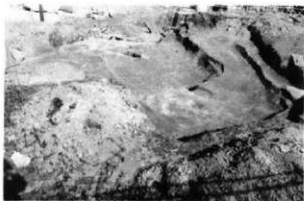
図版Ⅱ 風越Ⅰ号窯址



上段部 中央の溝は寄宿舎排水口管の跡



燃焼室 1部配電マンホールで切られる



窠址上の作業場とみる掘りこみ



窠址の中央に埋められた排水口管



灰 層

図版Ⅲ 遺物

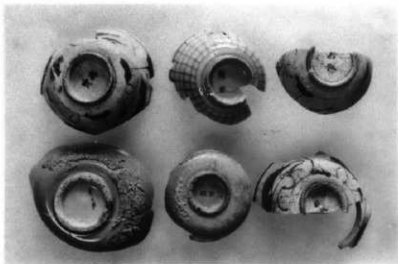
(1) 風越焼



茶碗 …… 左より口径10cm・高さ5.2cm, 口径11cm・高さ5.3cm,
口径8.8cm・高さ4.1cm, 口径10.2cm・高さ6.4cm

茶碗底部の銘

「飯田」「イ、夕」「信飯」がある



茶碗、杯、徳利片

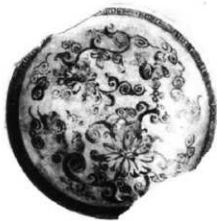
印による「飯田」「元」、「嘉元一嘉
永元年とみる」銘がある



青磁（左2個） 右 口径8.6cm・高さ5.8cm
 中 口径11.6cm・高さ5.7cm



燃焼室出土の青磁片



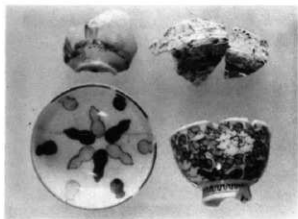
皿（内面） 口径11.2cm・高さ2.7cm



皿（底部……嘉永元製の銘がある）



杯と徳利片（左）…… 右より口径7.3cm・高さ3.2cm, 口径5.6cm・高さ4cm,
口径6cm・高さ4.8cm, 小形茶碗?口径6.2cm・高さ4.3cm



杯の染付



徳利, 急須, 杯片

(2) 窯 道 具



サヤと支柱……右の写真は逆になるが、大形のツク（高さは12.6cm）、中は棚の支柱（高さ13.4cm）、左はサヤ（口径15cm、高さ10cm）

窯道具のいろいろ……右上2点は色見道具、ツク・トチ・台



窯道具のいろいろ……右からツク・サヤ・枕（長さ16cm・幅10cm・厚さ6cm）



右から吸籠（底径17.4cm）、台・枕



図版IV 遺物出土と発掘スナップ



杯の出土



上段部の調査



燃焼室の調査

